

第6回アサザプロジェクト公開講座

霞ヶ浦の管理をめぐる合意形成に向けて

～ 互いの問題理解の違いを知る方法について～

齋藤和彦（森林総合研究所）

1. はじめに

互いの問題理解の違いを知ることは合意形成の出発点になります。今回は、1995年時点の旧建設省と霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議の論争を素材に、Cognitive Map（コグニティブ マップ）法を用いて互いの問題理解の違いを知る研究を紹介します。

2. 研究の背景

この研究は、森林計画に市民参加を導入するための研究の一部です。市民参加は、公的意思決定を行うための情報の統合と共有のプロセスです。よりよい計画をつくるためには、市民参加を導入し、様々な人の意見を聞き、できる限りの情報を集め、予測に漏れがないようにすることが大切です。しかし、様々な人から意見を聞くと、人によって意見が異なる場面が出てきます。そうした場合は、普通、議論を重ね、意見の違いを埋める努力をすることになりますが、その際は、お互いの意見のどこがどう違うのかを具体的に示すことが議論を有効にするポイントになると考えます。この研究は、その方法の研究です。

3. Cognitive Map法について

互いの意見の違いを見つけるには、それぞれの問題理解を把握する必要があります。今回は、その方法としてCognitive Map法を用いました。Cognitive Map法は、ある人の提案する施策がどのような因果関係をたどって施策目標を実現しようとしているのかを、問題を構成する要素、要素間の因果関係を示す矢印（ex.原因 結果）、影響を示す符号に分解して表す方法です（図1参照）。間接的な影響は、直列の場合は「積」を並列の場合は「和」をとるのが基本になります。情報源には、報告書や提言書、議事録、インタビューの記録などが用いられます。

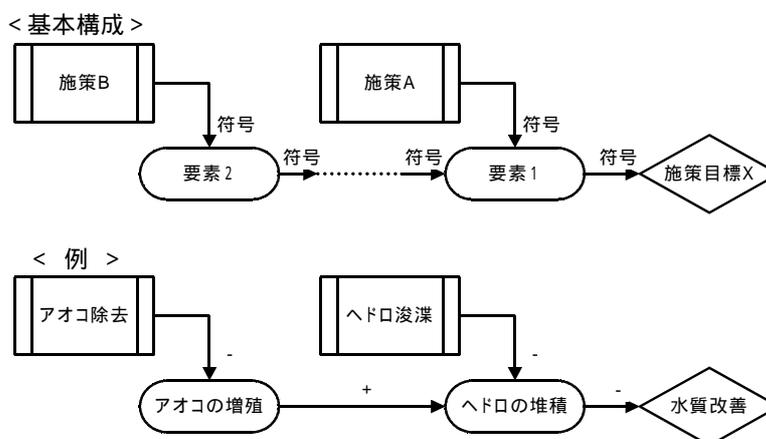


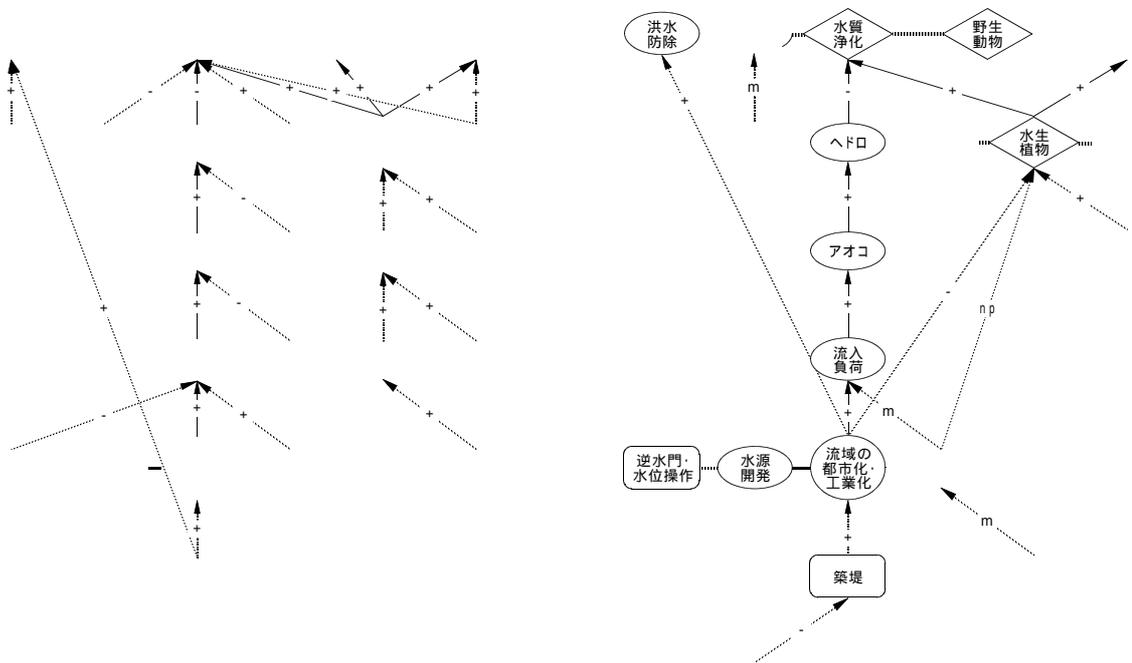
図1 Cognitive Mapの基本構成

4. 霞ヶ浦の水質保全を巡る見解の相違

今回は、霞ヶ浦の水質保全を巡る 1995 年時点の旧建設省と霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議の論争を素材に、この手法を試してみました（図 2、図 3）。

これらの図は、資料 1）、2）から作成した Cognitive Map をもとに、要素については、より原因的な要素から下から順に、また、同じ要素は同じ場所に配置し、矢印については、経路が複数ある場合、一番近い要素に向かう矢印だけ残すことで構造を単純化（= 最小辺有向グラフ化）しています。

このように互いの問題理解の構造を明らかにすることで、相手や自分自身の問題理解を見つめなおす機会が得られます。また、互いの見解のどこがどう違うのかを具体的に把握することができます。更に、自分の施策を相手の最小辺有向グラフに作用させることで、自分の施策が相手にどう受け取られるかを、ある程度予想することも出来ます。



5. 課題

この方法の難点は、Cognitive Map をつくる作業に手間がかかることです。また、Cognitive Map の作成にあたっては、作成したものを当事者に確認してもらう慎重さも求められます。今回の素材は、物理的な自然の結びつき中心の議論でしたが、例えば感性的な議論に適用できるかなど、より多くの事例で検証していく必要があります。

資料

- 1) 霞ヶ浦・北浦をよくする市民連絡会議（1995）「市民による環境保全戦略」かすみがうら・ローカルアジェンダ（第2版）. 80pp .
- 2) 建設省関東地方建設局・水資源開発公団（1995）霞ヶ浦 人と自然の共存を求めて - 霞ヶ浦の保全と利用について - . 94pp .